

〔資 料〕

老年看護学概論受講前後における看護学生の 高齢者観の変化

山 崎 さやか¹⁾ 黒 田 梨 絵¹⁾ 三 木 喜美子¹⁾

Change of nursing students' views of the elderly after they completed
“Introduction to Gerontological Nursing” course

YAMAZAKI Sayaka, KURODA Rie, MIKI Kimiko

抄 録

【目的】 高齢者への看護について専門的に学ぶ前段階にある看護学生において、老年看護学概論の受講前後での高齢者観の変化を明らかにすることである。

【方法】 私立大学看護学部の1年生54名を対象に、老年看護学概論受講前後で高齢者観についての質問紙調査を実施した。

【結果】 回収率は受講前調査で51名（94.4%）、受講後調査で42名（77.7%）であった。受講前と比べて受講後の正解割合が有意に高かった項目は、「単独世帯（ $\chi^2=28.34$, $p<.001$, $OR=3.20$ ）」、「記憶力（ $\chi^2=8.77$, $p=.003$, $OR=4.90$ ）」、「性興味（ $\chi^2=5.68$, $p=.017$, $OR=1.40$ ）」、「非効率（ $\chi^2=4.93$, $p=.026$, $OR=1.90$ ）」であった。

【結論】 高齢者への看護について専門的に学ぶ前段階にある看護学生において、老年看護学概論受講によって正確な高齢者観を養うことができる可能性が示唆された。

キーワード：老年看護学
看護学生
高齢者観

1) 健康科学大学 看護学部 看護学科

I. はじめに

日本では急速に高齢化が進んでおり、高齢者への理解を深める必要性が高まっている。平成26年度の厚生労働省の患者調査¹⁾によると、入院患者は65歳以上が7割を超え、外来患者は5割弱を占める。このように、日本の高齢者人口が増加し、かつ患者の大部分を高齢者が占める現状をふまえると、これから病院、介護福祉施設および行政機関等で働くことになる看護学生は多くの高齢者と関わるようになることが推測される。したがって、看護学生にとって高齢者差別のない高齢者理解は重要な課題である。

しかし、核家族化が進む中、高齢者と関わる体験が少ない近年の看護学生は、社会に流布する否定的な高齢者観、例えば喪失、孤独、虚弱、認知症などのイメージを内面化している可能性がある。高齢者との会話が乏しく同居をしていない看護学生は、高齢者と関わることへ拒否的であり、ケアの関心も低いことが示されている²⁾。

看護教育においては、実習を通し高齢者と関わることで看護学生の高齢者観は変化することが示されている。健康な高齢者との関わりは、看護学生が高齢者の肯定的なイメージを持つことに影響することが示唆されている³⁾⁴⁾。一方、病院や施設実習での疾患を抱える高齢者との関わりは、高齢者に対する否定的なイメージを獲得することが示されている⁴⁾。実習での高齢者との交流は、現場で関わった高齢者の特性が看護学生の高齢者観に影響を及ぼすことが推察される。

老年看護学概論は、老年看護学援助論および老年看護学実習に先立ち高齢者の身体的・心理的・社会的な特徴や統計的事実、高齢者を取り巻く社会福祉制度を学ぶことを目的としている。健康な高齢者のイメージや、疾患を抱えた高齢者のイメージだけに偏らない高齢者のありのままの姿を理解するためには、老年看護学概論の講義が重要な役割を果たすと考える。老年看護学概論の受講前後での高齢者観の変化を明らかにすることは、看護学生が偏見のない高齢者観を養う講義内容を検討する一助になると考える。

国内外の高齢者観に関する研究において「高齢者観」に統一した概念はなく、一般的には高齢者に対する漠然としたイメージでとらえられることが多いと指摘されている⁸⁾。看護学生を対象とした高齢者観を測定する海外の先行研究では、高齢者への態度と、高齢者に関する知識を分けて測定されている⁹⁾¹⁰⁾。国内の先行研究においては、SD (Semantic Differential) 法⁵⁾⁶⁾やイメージマップ分析⁷⁾などが看護学生の高齢者観の測定に使用されている。

本研究においては、老年看護学概論の講義内容と一致し、高齢者のありのままの姿を反映する高齢者の統計的な事実や知識を測定することを目的とするため、高齢者観の測定には Palmore の The Facts of aging quiz (以下エイジングクイズ) を使用した。エイジングクイズは、アメリカの老年学者 Palmore が開発した高齢者に関する知識を測る尺度である¹¹⁾。Palmore 自身によってエイジングクイズの信頼性と妥当性が評価され¹²⁾、その利便性から世界各国で翻訳され使用されている。日本では、前田の研究¹³⁾でエイジングクイズを日本語に翻訳し使用された後、日本版エイジングクイズが高齢者へ

の知識や偏見の調査研究に使われている¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾。日本においても、エイジングクイズは看護学生の高齢者に関する知識を測る尺度として用いられている⁶⁾¹⁸⁾¹⁹⁾²⁰⁾。

本研究の目的は、老年看護学実習の経験がなく高齢者への看護について専門的に学ぶ前段階にある私立大学看護学部1年生において、老年看護学概論の受講前後での高齢者観の変化を明らかにすることである。

Ⅱ. 用語の操作的定義

本研究では事実に基づく正確な高齢者に関する知識を問うエイジングクイズの得点を「高齢者観」と定義した。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査対象

201X年に入学した私立大学看護学部の1年生54名を調査対象とした。

2. 介入の手順

介入の手順は図1に示した。

201X年11月上旬、老年看護学概論第1回（初回講義）のガイダンス終了後に対象学生へ調査依頼を行い、受講前調査を実施した。本研究の趣旨について説明文書を配布し口頭で説明をした後、無記名自記式質問紙調査を行った。講義終了後に調査票を回収し、提出をもって研究への同意が得られたこととした。

1年次後期に開講される老年看護学概論（1単位15時間）は全8回の講義であった。講義の目的は、老年期にある人の身体の特徴を、心身の成長発達・発達課題、生活と社

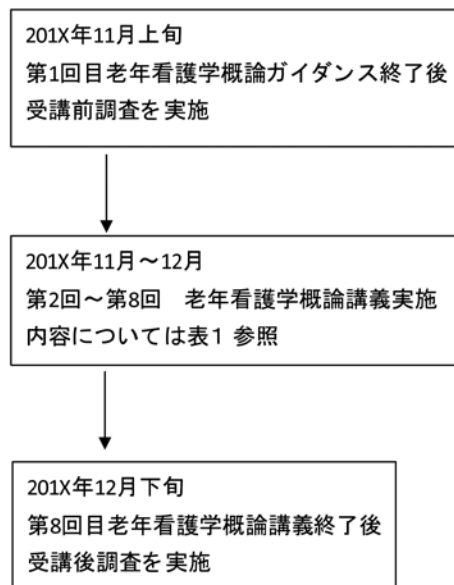


図1 介入の手順

会環境・健康特性から総合的に探求し、看護の重要性と保健医療福祉連携・協働の必要性を学ぶことであった。

201X年11月から12月に、第2回から第8回の老年看護学概論講義を行い、主に講義形式であった。老年看護学概論講義内容は表1に示した。第1回目は高齢者と社会システムについて統計資料を用いて説明した。第2回目はライフサイクルと老年期の成長課題および発達課題について、第3回目は加齢による身体的・心理的・社会的変化を説明した。第4回目と第5回目は、高齢者の保健医療福祉制度、家族介護、ソーシャルサポート（フォーマル・インフォーマルなサポートシステム）についてグループワークを行った。第6回目は高齢者介護支援のための介護保険制度および高齢者の活躍について、第7回目は高齢者虐待と関連する法律および成年後見人制度について、第8回目は老年看護学概論の振り返りとまとめを行った。老年看護学概論を学ぶことの動機付けとして、毎回講義終了後に、その日の講義内容に関係する看護師国家試験の過去問題の小テストを実施し、次の講義で小テストの解説をした。

表1 老年看護学概論講義内容

講義内容		
第1回	ガイダンス	高齢者と社会システム
第2回	ライフサイクル	老年期の成長課題・発達課題
第3回	加齢による身体的、心理的、社会的変化	
第4回	グループワーク	高齢者の保健医療福祉、家族介護、
第5回		ソーシャルサポートについて
第6回	介護保険制度	高齢者の活躍
第7回	高齢者虐待と関連する法律	成年後見人制度
第8回	講義の振り返りとまとめ	

201X年12月下旬、老年看護学概論第8回目（最終講義）終了後に対象学生へ調査依頼し、受講後調査を実施した。本研究の趣旨について説明文書を配布し口頭で説明をした後、無記名自記式質問紙調査を行った。講義終了後に調査票を回収し、提出をもって研究への同意が得られたこととした。

3. 調査票の内容

調査票の質問内容と解答は表2に示した。高齢者観については、Palmore のエイジングクイズ¹⁰⁾25項目で測定した。それぞれの質問は正しい（正）か、正しくないか（誤）の2択であり、質問についての正誤を正しく解答できたものを正解として1点、質問についての正誤を間違えて解答したものを不正解として0点と換算した。得点範囲は0点から25点である。得点が高いほど正確な高齢者観を持ち、得点が低いほど不正確な高齢者観を持つ。

表2 調査票の質問内容と解答 (Palmore のエイジングクイズ*)

項目番号	質問内容	解答
1	大多数の高齢者は、記憶力が落ちたり、ぼけたりする	誤
2	高齢者になると耳や目などいわゆる五感がすべて衰えがちである	正
3	ほとんどの高齢者は、セックスに対する興味も能力ももっていない	誤
4	高齢者になると、肺活量が落ちる傾向がある	正
5	大多数の高齢者は、多くの時間をみじめな気持ちで過ごしている	誤
6	極度の暑さや寒さは高齢者にとって特に危険である	正
7	わが国の認知症の高齢者の数は、100万人には達していない	誤
8	大多数の高齢者は防げるような事故だけがをしている	正
9	ほとんどの高齢者は、若い人ほど効率よく働けない	誤
10	およそ8割の高齢者は健康で、普通の生活をおくるのにさしつかえない	正
11	ほとんどの高齢者は、自分の型にはまってしまって、なかなかそれを変えることができない	誤
12	高齢者は、何か新しいことを学ぶのに若い人よりも時間がかかる	正
13	大多数の高齢者にとって、新しいことを学ぶのはほとんど不可能である	誤
14	ほとんどの高齢者は、若い人よりも反応時間が長い	正
15	大体、高齢者というものは、みな同じようなものだ	誤
16	大多数の高齢者は、めったに退屈しない	正
17	わが国では老人の単独世帯は2割に満たない	誤
18	高齢者は、若い人よりも職場で事故にあうことが少ない	正
19	知能は年齢とともに低下する	誤
20	わが国の女性は男性よりも平均で約5年長生きである	正
21	一人暮らしの高齢者の半分以上は、貧困世帯である	誤
22	わが国では、定年退職後は半数以上の人になんらかのかたちの就業を希望している	正
23	高齢者はあまり運動せずに休養する方がよい	誤
24	抑うつは高齢者にとっての重要な問題である	正
25	パーソナリティは、髪の毛や肌と同様、年とともに変わるものである	誤

*エイジングクイズは高齢者観を指す。

4. 分析方法

受講前後において高齢者観の得点分布を算出した。受講前後の高齢者観の得点は、平均値と標準偏差および中央値と25パーセントイル値を算出した。受講前後の2群で高齢者観の総得点の差について Mann-Whitney の U 検定を行った。受講前後において高齢者観の質問項目毎の正解割合を算出した。受講前後の2群で、各質問項目の正解割合と不正解割合について χ^2 検定 (期待値5未満の場合は Fisher の正確確率検定) を行い、不正解を基準としたオッズ比および95% 信頼区間を算出した。

統計学的有意水準は5%とした。加えて、本研究ではサンプル数によらない p 値の解釈のために効果量を測定した。効果量とは、サンプルサイズによって変化することのない、標準化された指標である²¹⁾。分析には IBM SPSS Statistics 21.0 for Window を用

いた。

5. 倫理的配慮

対象学生に、①研究目的、②研究方法、③自由意思、④個人情報保護、⑤結果の公表を文書と口頭で説明し、調査票の提出を持って同意を得たこととした。本研究に参加しなくても成績等に影響しないことを説明した。個人情報保護の点から調査票は無記名とした。健康科学大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号第25号）。

IV. 結 果

1. 対象者の属性

調査票は、看護学部1年生54名に配布し、受講前調査では51名（回収率 94.4%）、受講後調査では42名（回収率 77.7%）から回収された。

2. 受講前後での高齢者観得点の分布と平均点

受講前後での高齢者得点の分布と平均点を表3に示した。得点の分布は受講前では、16点（12名 23.5%）が最も多い。受講後では17点（8名 19.0%）が最も多く、次いで16点、18点、19点が同じ割合（6名 14.3%）を占めていた。受講前的高齢者観得点の平均は15.33(SD=1.76)点、受講後的高齢者観得点の平均は15.62(SD=2.96)点であった。

表3 受講前後での高齢者観得点の分布と平均点

受講前			受講後		
得点	n	%	得点	n	%
7	0	0.0	7	1	2.4
9	0	0.0	9	2	4.8
10	0	0.0	10	1	2.4
12	3	5.9	12	1	2.4
13	6	11.8	13	3	7.1
14	7	13.7	14	4	9.5
15	11	21.6	15	4	9.5
16	12	23.5	16	6	14.3
17	4	7.8	17	8	19.0
18	7	13.7	18	6	14.3
19	1	2.0	19	6	14.3
mean	(SD)		mean	(SD)	
15.33	(1.76)		15.62	(2.96)	

得点範囲：0点-25点

3. 受講前後での高齢者観総得点の比較

受講前後での高齢者観総得点の比較を表4に示した。受講前の中央値は15点、受講後の中央値は16点であった。受講前後で高齢者観総得点の比較を行ったところ、総得点に有意な差は見られなかった（ $U=878.5$, $p=.133$ ）が、 $r=0.21-0.23$ であり効果量は小であった。

表4 受講前後での高齢者観総得点の比較

	n	Mdn	パーセンタイル			U	p	r	効果量の目安
			25	50	75				
受講前	51	15	14	15	16	878.5	0.133	0.12-0.23	小
受講後	42	16	14	16	18				

Mann-Whitney の U 検定

4. 受講前後での高齢者観質問項目ごとの正解割合

受講前後での高齢者観質問項目ごとの正解割合を表5に示した。受講前に正解割合が高かった質問項目は、項目番号4「高齢者になると、肺活量が落ちる傾向がある（肺活量）」、項目番号6「極度の暑さや寒さは高齢者にとって特に危険である（寒暖の差）」の2項目（51名 100%）であった。次いで、項目番号12「高齢者は、何か新しいことを学ぶのに若い人よりも時間がかかる（新しいこと）」、項目番号15「大体、高齢者というものは、みな同じようなものだ（同じもの）」、項目番号23「高齢者はあまり運動せずに休

表5 受講前後での高齢者観質問項目ごとの正解割合

項目番号	質問内容		受講前 (N=51)		受講後 (N=42)	
			n	正解割合(%)	n	正解割合(%)
1	大多数の高齢者は、記憶力が落ちたり、ぼけたりする	記憶力	3	5.9	12	28.6
2	高齢者になると耳や目などいわゆる五感がすべて衰えがちである	五感衰退	39	76.5	30	71.4
3	ほとんどの高齢者は、セックスに対する興味も能力ももっていない	性興味	31	60.8	35	83.7
4	高齢者になると、肺活量が落ちる傾向がある	肺活量	51	100.0	39	92.9
5	大多数の高齢者は、多くの時間をみじめな気持ちで過ごしている	みじめな	47	92.2	36	85.7
6	極度の暑さや寒さは高齢者にとって特に危険である	寒暖の差	51	100.0	37	88.1
7	わが国の認知症の高齢者の数は、100万人には達していない	認知症	37	72.5	27	64.3
8	大多数の高齢者は防げるような事故でけがをしている	事故けが	46	90.2	37	88.1
9	ほとんどの高齢者は、若い人ほど効率よく働けない	非効率	13	25.5	20	47.6
10	およそ8割の高齢者は健康で、普通の生活をおくるのにさしつかえない	健康	14	27.5	5	11.9
11	ほとんどの高齢者は、自分の型にはまってしまって、なかなかそれを変えることができない	型にはまる	10	19.6	12	28.6
12	高齢者は、何か新しいことを学ぶのに若い人よりも時間がかかる	新しいこと	48	94.1	34	81.0
13	大多数の高齢者にとって、新しいことを学ぶのはほとんど不可能である	不可能	42	82.4	32	76.2
14	ほとんどの高齢者は、若い人よりも反応時間が長い	反応時間	45	88.2	31	73.8
15	大体、高齢者というものは、みな同じようなものだ	同じもの	48	94.1	36	85.7
16	大多数の高齢者は、めったに退屈しない	退屈	6	11.8	7	16.7
17	わが国では老人の単独世帯は2割に満たない	単独世帯	13	25.5	34	81.0
18	高齢者は、若い人よりも職場で事故にあうことが少ない	事故	12	23.5	14	33.3
19	知能は年齢とともに低下する	知能低下	17	33.3	20	47.6
20	わが国の女性は男性よりも平均で約5年長生きである	女性長生き	42	82.4	31	73.8
21	一人暮らしの高齢者の半数以上は、貧困世帯である	貧困世帯	24	47.1	20	47.6
22	わが国では、定年退職後は半数以上の人がなんらかのかたちの就業を希望している	就業希望	40	78.4	29	69.0
23	高齢者はあまり運動せずに休養の方がよい	休養	48	94.1	37	88.1
24	抑うつは高齢者にとっての重要な問題である	抑うつ	47	92.2	34	81.0
25	パーソナリティは、髪の毛や肌と同様、年とともに変わるものである	人格変化	8	15.7	7	16.7

養する方がよい (休養)」(それぞれ48名 94.1%) の正解割合が高かった。

受講前に正解割合が低かった項目は、項目番号1「大多数の高齢者は、記憶力が落ちたり、ぼけたりする (記憶力)」(3名 5.9%)、項目番号16「大多数の高齢者は、めったに退屈しない (退屈)」(6名 11.8%)、項目番号25「パーソナリティは、髪の毛や肌と同様、年とともに変わるものである (人格変化)」(8名 15.7%) の順で低かった。

受講後の正解割合が高かった項目は、項目番号4「高齢者になると、肺活量が落ちる傾向がある (肺活量)」(39名 92.9%) であり、次いで項目番号6「極度の暑さや寒さは高齢者にとって特に危険である (寒暖の差)」(37名 88.1%)、項目番号23「高齢者はあまり運動せずに休養する方がよい (休養)」(37名 88.1%) で高かった。

正解割合が低かった項目は、項目番号10「およそ8割の高齢者は健康で、普通の生活をおくるのにさしつかえない (健康)」(5名 11.9%) であり、次いで、項目番号16「大多数の高齢者は、めったに退屈しない (退屈)」(7名 16.7%)、項目番号25「パーソナリティは、髪の毛や肌と同様、年とともに変わるものである (人格変化)」(7名 16.7%) の順で低かった。

5. 受講前後での高齢者観質問項目ごとの正解割合と不正解割合の比較

受講前後での高齢者観質問項目ごとの正解割合と不正解割合を比較した結果を表6に示した。受講前と比べて、受講後の正解が有意に高かった項目は、項目番号17「単独世帯 ($\chi^2 = 28.34, p < .001, OR = 3.20$)」、項目番号1「記憶力 ($\chi^2 = 8.77, p = .003, OR = 4.90$)」、項目番号3「性興味 ($\chi^2 = 5.68, p = .017, OR = 1.40$)」、項目番号9「非効率 ($\chi^2 = 4.93, p = .026, OR = 1.90$)」の4項目であった。

受講前と比べて、受講後の正解割合が有意に低くなった項目はなかった。

表6 受講前後での高齢者観質問項目ごとの正解割合と不正解割合の比較

質問	受講前 (n=51)			受講後 (n=42)			χ^2	p	OR	95%CI [LL, UL]	Cramer のV	効果量 の目安
	回答	n	%	回答	n	%						
1 記憶力	正解	3	20.0	正解	12	80.0	8.77	.003**	4.90 ref	[1.47, 16.09]	.31	中
	不正解	48	61.5	不正解	30	38.5						
2 五感衰退	正解	39	56.5	正解	30	43.5	0.31	.580	0.90 ref	[0.73, 1.19]	.06	—
	不正解	12	50.0	不正解	12	50.0						
3 性興味	正解	31	47.0	正解	35	53.0	5.68	.017*	1.40 ref	[1.06, 1.78]	.25	小
	不正解	20	74.1	不正解	7	25.9						
4 肺活量	正解	51	56.7	正解	39	43.3	—	—	—	—	—	—
	不正解	0	0.0	不正解	3	100.0						
5 みじめな	正解	47	56.6	正解	36	43.4	1.00	.253	0.90 ref	[0.80, 1.08]	.10	小
	不正解	4	40.0	不正解	6	60.0						
6 寒暑の差	正解	51	58.0	正解	37	42.0	—	—	—	—	—	—
	不正解	0	0.0	不正解	5	100.0						
7 認知症	正解	37	57.8	正解	27	42.2	0.73	.392	0.90 ref	[0.67, 1.17]	.09	—
	不正解	14	48.3	不正解	15	51.7						
8 事故けが	正解	46	55.4	正解	37	44.6	0.11	.501	1.00 ref	[0.85, 1.13]	.03	—
	不正解	5	50.0	不正解	5	50.0						
9 非効率	正解	13	39.4	正解	20	60.6	4.93	.026*	1.90 ref	[1.06, 3.29]	.23	小
	不正解	38	63.3	不正解	22	36.7						

10	健康高齢	正解 不正解	14 37	73.7 50.0	正解 不正解	5 37	26.3 50.0	3.42	.064	0.40 ref	[0.17, 1.11]	.19	小
11	型にはまる	正解 不正解	10 41	23.8 17.6	正解 不正解	12 30	54.5 42.3	1.03	.311	1.50 ref	[0.70, 3.03]	.11	小
12	新しいこと	正解 不正解	48 3	58.5 27.3	正解 不正解	34 8	41.5 72.7	3.83	.050	0.90 ref	[0.73, 1.01]	.20	小
13	不可能	正解 不正解	42 9	56.8 47.4	正解 不正解	32 10	43.2 52.6	0.54	.463	0.90 ref	[0.75, 1.14]	.08	—
14	反応時間	正解 不正解	45 6	59.2 35.3	正解 不正解	31 11	40.8 64.7	3.21	.073	0.80 ref	[0.68, 1.03]	.19	小
15	高齢者同じ	正解 不正解	48 3	57.1 33.3	正解 不正解	36 6	42.9 66.7	1.86	.156	0.90 ref	[0.79, 1.05]	.14	小
16	退屈しない	正解 不正解	6 45	46.2 56.3	正解 不正解	7 35	53.8 43.8	0.46	.497	1.40 ref	[0.52, 3.89]	.07	—
17	単独世帯	正解 不正解	13 38	27.7 82.6	正解 不正解	34 8	72.3 17.4	28.34	<.001***	3.20 ref	[1.94, 5.19]	.55	大
18	事故	正解 不正解	12 39	46.2 58.2	正解 不正解	14 28	53.8 41.8	1.10	.294	1.40 ref	[0.74, 2.73]	.11	小
19	知能低下	正解 不正解	17 34	45.9 60.7	正解 不正解	20 22	54.1 39.3	1.96	.161	1.40 ref	[0.87, 2.36]	.15	小
20	女性長生き	正解 不正解	42 9	57.5 45.0	正解 不正解	31 11	42.5 55.0	1.00	.318	0.90 ref	[0.72, 1.12]	.10	小
21	貧困世帯	正解 不正解	24 27	54.5 55.1	正解 不正解	20 22	45.5 44.9	0.00	.957	1.00 ref	[0.66, 1.56]	.01	—
22	就業希望	正解 不正解	40 11	58.0 45.8	正解 不正解	29 13	42.0 54.2	1.06	.303	0.90 ref	[0.69, 1.13]	.11	小
23	休養	正解 不正解	48 3	56.5 37.5	正解 不正解	37 5	43.5 62.5	1.06	.254	0.90 ref	[0.82, 1.07]	.11	小
24	抑うつ	正解 不正解	47 4	58.0 33.3	正解 不正解	34 8	42.0 66.7	2.57	.109	0.90 ref	[0.74, 1.04]	.17	小
25	人格変化	正解 不正解	8 43	53.3 55.1	正解 不正解	7 35	46.7 44.9	0.02	.898	1.10 ref	[0.42, 2.69]	.01	—

χ^2 検定 *** p < .001 ** p < .01 * p < .05

OR: オッズ比 95% CI: 95% 信頼区間 ref: 基準 Cramer の V: 効果量

V. 考 察

1. 正解割合が受講前と比較して受講後で有意に高くなった質問項目

項目番号17「わが国では老人の単独世帯は2割に満たない（単独世帯）」は、老年看護学概論講義において、統計資料に基づく高齢者の特徴を詳細に説明したため、正解割合が有意に高くなったと推察される。加えて、講義後に行った老年看護学概論に関わる看護師国家試験の過去問題は、超高齢社会に関する各種統計に基づく問題が多く、高齢者の単独世帯についての問題もあった。そのため、学生が高齢者世帯の特徴を、国家試験と結びつけて重要性が高いと認識し学んだため、受講前と比べて受講後は有意に正解割合が上がった可能性が考えられる。

項目番号1「大多数の高齢者は、記憶力が落ちたり、ぼけたりする（記憶力）」は、老年看護学概論講義において、視聴覚資料を使用し、高齢者の発達と流動性知能と結晶性知能について説明を行ったため、受講前後で有意差がみられたと推察される。日常生活にまつわる結晶性知能の具体的な例を示し、結晶性知能は生涯にわたって発達することに重点を置いて講義を組み立てた。また、高齢者の結晶性知能の発達に関しては、講

義後に行った看護師国家試験の過去問題でも出題されたため、講義内容と国家試験とを結びつけることによって、学習効果が高まった可能性がある。

項目番号3「ほとんどの高齢者は、セックスに対する興味も能力ももっていない（性興味）」については、この項目に関係する高齢者の性についての説明は老年看護学概論では実施しなかった。しかし、老年看護学概論と平行して行われた人間の生殖に関する講義において、老年期の心身の変化をふまえた高齢者の性について学習した効果と推察される。

項目番号9「ほとんどの高齢者は、若い人ほど効率よく働けない（非効率）」は、講義の中で近年の高齢者介護をめぐるトピックスとして、高齢者が高齢者を介護する新聞記事を紹介した。超高齢社会においては、高齢者にも仕事や役割が求められ、高齢者であっても働くことで社会貢献ができることへの理解を深めた。また、新聞記事を活用し近年のトピックスを扱ったことで、知識と実際の高齢者の活躍が結びつき学習効果が高まった可能性がある。

2. 正解割合が受講前と比較して受講後で有意な変化のみられなかった質問項目

全25項目中21項目において、受講前後で有意な変化がみられなかった。これら質問項目については、老年看護学概論講義の中で強調しなかったため、学生の短期記憶に残らなかった可能性がある。看護学生が適切な高齢者観を総体的に養うためには、1年次で受講する老年看護学概論に加えて、2年次で受講する老年看護学援助論Ⅰおよび老年看護学実習Ⅰ（施設実習）や、3年次で受講する老年看護学援助論Ⅱおよび老年看護学実習Ⅱ（病院実習）にて知識を補完していく必要がある。したがって、21項目において老年看護学概論受講前後で有意な差がなかったことは、妥当な結果であると考ええる。本研究の結果は、2年次および3年次で実施される老年看護学援助論Ⅰ・Ⅱ、老年看護学実習Ⅰ・Ⅱにおいて重点的に補完すべき部分を明らかにしたことから、役立つ知見になると考える。

3. 今後の展望

看護学生は、老年看護学概論講義を受講することで、事実に基づく正確な高齢者観を持つことができる可能性が示唆された。老年看護学実習を通してかかわる高齢者は何らかの疾患や障害を抱えていることが多いため、実習に先立つ老年看護学概論は偏見のない高齢者理解において鍵となる。鳴海ら²²⁾は、高齢者の心理描写が記述されている図書を活用した教育方法を取り入れることで、老年看護学初学者の看護学生が高齢者の心に共感できることを示した。相手を理解するためには、自己体験に基づくだけでなく、自分の持っている知識や想像力を活用する力が必要である。とりわけ、高齢者との体験が乏しい看護学生においては、高齢者についての知識を得て、高齢者について考えるきっかけともなる老年看護学概論の講義が、正確な高齢者像を捉える上で重要な役割を担うと考える。

加えて、看護の専門性を高めることによって高齢者への偏見を持たせる可能性があるため、高齢者への看護を専門的に学ぶ前段階にある看護学生（言い換えると老年看護学

初学者)に対して、正確な高齢者像を教えることは重要であると考える。

木下²³⁾は、医療や福祉専門職による高齢者理解が、専門職視点に拠った理解になることを指摘する。専門職は問題解決志向であり、この思考過程を繰り返した結果、問題があるかを問わずに問題があるという前提で高齢者を捉えているという木下の指摘は、老年看護学を教授する上で非常に重要である。専門性を高めることには、高齢者への偏見やスティグマを強化する可能性も孕んでいること考慮し、老年看護学初学者に対して高齢者の事実を事実としてありのままに伝えることが、偏見のない高齢者理解のために重要であると推察される。そして、この役割の一部を担うのは老年看護学概論の講義であると考える。

4. 研究の限界

本研究の限界の1つ目は残存する交絡要因が存在する可能性である。学生の基本属性の調査をしていないため、学生のパーソナリティに関わる要因や、個人的な体験が高齢者観に影響を与えたことも考えられる。2つ目は、限定された集団を対象とした研究であるため、この結果を一般化することはできない。今後、対象を変えて検討していくことがいくことが望まれる。

VI. 結 論

老年看護学実習の経験がなく、高齢者への看護を専門的に学ぶ前段階にある看護学生においては、項目番号17「わが国では老人の単独世帯は2割に満たない(単独世帯)」、項目番号1「大多数の高齢者は、記憶力が落ちたり、ぼけたりする(記憶力)」、項目番号3「ほとんどの高齢者は、セックスに対する興味も能力ももっていない(性興味)」、項目番号9「ほとんどの高齢者は、若い人ほど効率よく働けない(非効率)」の4つの項目の正解割合が、老年看護学概論受講前と比べて受講後で有意に高くなった。この結果から、老年看護学概論受講によって正確な高齢者観を養うことができる可能性が示唆された。

また、受講前と比べて受講前後で有意な変化はみられなかった高齢者観の項目については、2年次以降で受講する老年看護学援助論および老年看護学実習において知識を補完して正確な高齢者観を総体的に養う必要性が示唆された。

文 献

- 1) 厚生労働省：平成26年患者調査。 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/14/> (2017年9月11日)
- 2) 三輪のり子, 金原京子：ゆとり世代の看護学生における高齢者観の特徴「普段みたり聞いたりする像」「将来なりたい像」「将来なりたくない像」「自分にとっての存在」の視点から読み解く。老年看護学 Vol. 19, No. 2, 47-57, 2015.
- 3) 樋田小百合, 熊田ますみ, 大瀧康平, 他：健康高齢者との関わりによる看護学生の高齢者イメージ。

岐阜医療科学大学紀要 Vol. 8, 7-15, 2014.

- 4) 新藤ゆかり, 原井美香, 村松真澄, 他: 老年看護学実習における看護学生の高齢者イメージの変化: 地域健康高齢者を対象とした実習Ⅰおよび認知症・虚弱高齢者を対象とした実習Ⅱ前後の比較. 日本看護学学会論文集老年看護 Vol. 42, 151-154, 2012.
- 5) 大塚邦子, 正野逸子, 日浦瑞枝, 他: 看護学生の老人のイメージに関する研究—SD法によるイメージ評価と描画特徴とを中心に—. 老年看護 Vol. 4, No. 1, 98-104, 2012.
- 6) 高野真由美: 看護学生の背景による老人イメージ, 知識, エイジズムの相違—FAQ, FSA, SD法を用いての分析—. 看護教育 Vol. 38, 147-149, 2007.
- 7) 中村真理子, 服部紀子, 横島啓子: 老人看護実習後の高齢者イメージ—老人イメージマップの連想言語から—. 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報 Vol. 12, 18-29, 2002.
- 8) 高橋一公: 将来像としての「老人観の測定(1)—一般的老人イメージのSD法とテキストマイニングによる分析を通して—. 東京未来大学研究紀要 Vol. 5, 61-72, 2012.
- 9) E Dianne Greenhill, Marion F Baker. "The Effects of a Well Older Adult Clinical Experience on Students' Knowledge and Attitudes" *Journal of Nursing Education*, Vol. 25, No. 4: pp. 145-147, 1986.
- 10) SJ Sheffield. "Do clinical experiences affect nursing students' attitudes toward elderly?" *Journal of Nursing Education* 1, Vol. 34, No. 7: pp. 312-316, 1995.
- 11) E Palmore. "Facts on aging a Short quiz" *The gerontologist*, Vol. 17, No. 4: pp. 315-320, 1997.
- 12) E Palmore. "The facts on aging quiz: A review of findings" *The Gerontologist*, Vol. 20, No. 6: pp. 315-230, 1980.
- 13) 前田大作: 大都市青壮年の老人観および老親に対する責任意識. 社会老年学 Vol. 10, 3-22, 1979.
- 14) 古谷野亘: 通年講義による老人観の変容—専門科目「老人福祉論」の場合—. 桃山学院大学社会学論集 Vol. 23, No. 2, 1-19, 1990.
- 15) 堀薫夫, 大谷英子: 高齢者への偏見の世代間比較に関する調査研究—The Facts on Aging Quizを用いて—. 大阪教育大学紀要第Ⅳ部門 Vol. 44, No. 1, 1-12, 1995.
- 16) 奥山正司: エイジズム—高齢者へのステレオタイプ. 現代のエスプリ 109-118, 1999.
- 17) 小坂啓史: エイジズムとしての老年観の要因に関する実証的研究—農村既婚女性を対象とした家族規範との関連分析—. ソシオロジスト Vol. 2, 41-72, 2000.
- 18) 今井充子, 松村喜世子: 看護学生の老人観に関する研究—看護学生と高校生を対象としたFAQによる老人に関する知識測定—. 老年看護 Vol. 28, 155-158, 1997.
- 19) 小川妙子: 看護学生の高齢者へのエイジズム—1年生と3年生のFAQの比較—. 順天堂医療短期大学 Vol. 12, 35-45, 2001.
- 20) 南彩子: エイジズム: その意味と大学生への調査に見る高齢者差別意識. 天理大学人権問題研究室紀要 Vol. 7, 1-14, 2004.
- 21) 水本篤, 竹内理: 研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—. 英語教育研究 Vol. 1, 57-66, 2008.
- 22) 鳴海喜代子, 田中敦子, 伊藤道子: 老年看護学における高齢者理解のための教育方法の検討—看護学生の情緒的理解を促す教材の活用—. 老年看護学 Vol. 8, No. 1, 70-77, 2003.
- 23) 木下康仁『ケアと老いの祝福』勁草書房: 26-31, 1997.

Abstract

Objective : To examine the changes in nursing students' views of the elderly after they completed the "Introduction to Gerontological Nursing" course.

Methods : Participants were 54 first-year university nursing students. A questionnaire survey was conducted before and after the class. The questionnaire consisted of 25 items covering basic physical, mental, and social facts about aging that were considered to represent students' views of the elderly.

Results : Response rates were 94.4% and 77.7% for the pre- and post-class surveys, respectively. There were significant differences between the pre- and post-class scores for 4 items: one-person household, memory, sexuality, and inefficiency. Nursing students' views of the elderly improved significantly after the course.

Conclusion : Our results suggest that "Introduction to Gerontological Nursing" course plays an important role in the appropriate development of first-year nursing students' views of the elderly.

Key Words : Gerontological Nursing

Nursing student

View of the elderly